

# 岡井朝子 在バンクーバー日本国総領事

## 「変わらぬ思い 29年間外交官として追求してきたこと」

講演タイトルでは29年間とありますが、私には高校2年の時に外交官になりたいと思ったときから、実際は35年間持ち続けている変わらぬ思いがあります。高校2年生の時、ノーベル財団主催の青年交流プログラムに日本代表として参加しました。ストックホルムで、ノーベル賞授賞式や市庁舎での晩餐会、受賞者の講義を聞くなどのプログラムです。私は、日本代表と

# 日系女性企業家協会20周年記念講演会 岡井朝子在バンクーバー日本国総領事 唐沢良子氏

## 新報リポート



日系女性企業家協会（JWBA）が設立20周年を迎え、それを記念する講演会が9月28日、バンクーバー市ダウンタウンのロブソンスクエアで開催された。用意されていた175席は満席となり、ベンチ席が追加され約200人の聴衆が会場を埋めた。講師を務めた、岡井朝子在バンクーバー日本国総領事と唐沢良子氏による講演の概要を紹介する。

◀岡井総領事

それが今から35年前で、その時から現在まで全く変わらぬ思いを持っています。それは、国際社会における日本の影響力、貢献力、発信力を高め、大きな存在感を確保するために力を尽くしたいということです。これは外交官としての人生を通じて貫いて変わらぬ思いです。

**国際協力に携わって**  
私は平成元年に外務省に入省しました。その3年前に男女雇用機会均等法が制定され、私は女性20番目のキャリア外交官です。キャリアの7、8割は国際協力や援助といった分野に携わってきました。その分野に関しては非常に思いが強いのです。

1952年にサンフランシスコ講和条約が発効し、日本は国際社会に復帰。1954年にコロンボプランという国際機関に加盟し技術協力を始めました。これが政府開発援助（ODA）（Official Development Assistance）の始まりです。日本のODA実績は、70年代と80年代を通じて増加し、1989年に世界最大の援助国になりました。2001年から徐々に順位を下げて、2007年に5位、2015年はかろうじて4位になりました。日本国内では1991年以降、経済低迷時代に入り、ODAに對して非常に厳しい目向けられるようになりました。私は内外に環境の変化がある中、どのようにODAを時代にあったものにするかという岐路に立つODA行政のただなかにいました。ODAは単なる途上国への慈善事業と思っではいけません。地球

規模の問題の解決にも資するし、日本にとって好ましい国際環境を作るのにも役立つものです。日本は資源・食料を海外に依存しているのですから、世界の安定が日本の安定に直結します。私は開発協力は戦後一貫して平和国家としての道を歩んできた日本が持つ最大の外交ツールだと思っています。

2000年、パキスタンの経済班長として赴任しました。当時のパキスタンは軍事政権だったり、核実験をしたりと、さまざまな理由で日本も含め各国が援助を差し止めていました。2001年9月11日、アメリカの同時多発テロが発生、パキスタンは危険地域になり、邦人を含む外国人の多くが退避を迫られました。そんな中、過去数十年、現地において地に足の着いた援助を実施してきたのは日本であり、最大のドナーでした。テロとの戦いにおいて、パキスタンを不安定化させないことが、国際社会の利益となる中、それまでパキスタンを疎遠にしてきた援助国から協力を引き出す役目を担うには、日本において他にありません。日本国内を説得し、新規援助を出してもらおうと努力し、対外的にはドナー会議を主導してまとめ、パキスタン国内では援助関係者が退避した中で、新規援助の実施に奔走していました。この時代、私は日本の貢献を際立たせることに夢中でした。

2006年から2009年にかけて、日本の援助実施体制の大改革が行われました。それに先立ち2005年から、当時経済協力局の政策課首席事務官というポジションに夢中でした。

ンについていました。省をあげた大改革の青写真を描く、司令塔たる幹部を直接補佐する立場です。2006年には、ODA予算と広報担当の企画官になり、財務省から予算を取ってくる役回りです。そのためにも、国民の皆さんにODAの重要性を理解してもらわなくてはなりません。2007年には、初代人道支援室長になりました。これまで国際機関への拠出と援助は部署が分かれていたのですが、初めてこれを統合し、紛争で国家機能が麻痺した弱い弱国を復興につなげる移行期の援助に取り組みました。続いて2009年に、アフリカ担当の課長になり、TICAD（Tokyo International Conference on African Development）という日本がアフリカ開発のために立ち上げた国際枠組みを推進する立場になりました。官民連携で、アフリカと日本がウィン・ウィンの関係を築くために、これまで奔走しました。

そして、2014年に在スリランカ大使館の次席になりました。同国は伝統的に、日本が最大の援助国として発展を支えてきたのですが、内戦終結時の対応を巡り、当時欧米との関係が冷えたこともあり、その隙間を縫って中国の進出が顕著になっていました。この中で、日本の立ち位置を実際の貢献によって確固たるものとするのに腐心しました。

このように、援助の実施体制が変革を遂げる中、さまざまなポジションから、常に日本の影響力、発信力といったものをどう確保するかを考えてきました。

**マルチ外  
国連代表部時代**  
2010年から2014年まで、国連代表部で平和維持活動やアフリカ問題を担当しました。日本が安全保障理事会の非常任理事国であった時代も含まれます。日本人は国際秩序とは既成のものであると考えがちですが、実は日々の実績から形作られているのです。日本としては、国連での国際的な枠組みや規範作りにも積極的に関与して、日本にとっても、世界にとっても意義のある世界規範を作りたいうことです。マルチの世界での日本の発信力とは、日本の旗を見せればよいというものではありません。いかに有意義なことを提言して、それを世界のスタンダードにさせるかに醍醐味があるのです。

# 唐沢良子氏 Audain Foundation 役員

## 「隠れた力で人生を切り開く」

隠れた力とは、人生の下準備だと思っています。下準備には先人の教え、教訓、敗北、成功といった人生経験など、多くの意味が含まれています。私は人生を「学ぶ時代」「働く時代」「教える時代」と3つに分けています。私は美容師だったので、その技術を教えるという機会がありました。たく思っていました。そして、将来自分の持っている技術を教えたに願っていました。現在は専業主婦なので、毎日の生活に役立つことを、日本やイギリスにいる甥や姪に口ずさく言っていました。ある日、だ名が書いてしまいましたが、イギリスの家族は私のことをインスペクターと呼び、日本ではハリケン良子と呼ばれています。

私は、甥と姪に「どんな仕事でもいいから、その仕事の達人になれるように努力しなさい」と言っています。学ぶ時代にしっかりと準備ができていられると知恵やアイデアが出てきます。そして、下準備を繰り返していると思いがついてくるのです。しかし、人生には落とし穴があるものです。自信を持って生きてきたのに、ある日突然考えもしなかつた、倒産、離婚、愛する家族の死、病氣



事など数知れない問題に突き当たり、「もう生きていくことに疲れた」と、浅はかな考えから過去の罪を犯してしまいがちです。自分はダメだと決めたと、多々から人生は閉じられ、何か解決策はないかと前向きに考えた時には必ず道は開かれると信じています。考えていけば知恵やアイデアが浮かんできます。そして、気が気づかされ、そこから一歩が踏み出せる。そのようなものを隠れた力だと思っています。

**外国へ行く決心**  
私は16歳の時に隠れた力を経験しました。自分の人生に将来が見えだせず悩んだとき、隠れた力は頭の中で突然アイデアとして生まれたのです。それは人が聞いたら叶うはずがないと思われるようなアイデアを信じてでも私は望むつなぎ、それは現実になりました。

私にとって聖書のように頼りになる本があります。それは、山岡宗八作「徳川家康」この本は間違なく私の人生

の準備をした隠れた力です。家康の教訓「人の一生は、重荷を負って遠き道を行くべし」と、急ぐべからず、は、焦る私の気持ちを慰め、勇気づけてくれました。過去を振り返って、この教訓は私の人生の道標になっていたことに気づきます。

私は群馬県で4人きょうだいの二女として生まれました。その頃は近所の家もみな、貧しさで豊かさが混じった生活を送っており、自分の家が貧しいとは思いませんでした。そんなある日、私は自分の家が豊かでないことを知らされました。私が中学3年生になると、母が私だけ部屋に呼び、「良子、就職してくれないか」というのです。理由を尋ねると「まんまが食えなくなるのかとシヨックでした。母に言われたこと考えてみる、高校くらい出て女一人で子供を養えるような金は稼げない。これからの女は自立しなくちゃだめだ。いいか、美容師の腕さえあれば食っていける。普段はめっちゃやめやめな母でした。人がを説得する術には長けていたのです。

私は母の言葉を信じて就職を決めました。卒業式が終わると友達にさよならも言わず、朝一番の列車で家を出ました。着いたのは千葉県野田市の小さな駅、すりガラスに赤いペンキの文字で『パリ美容室』と書かれた店を見た時は、嫌な気分になりました。美容師の免許を取った私は、4年間働いた野田を後にし、東京のおじを訪ねて、美容室を紹介してもらおうと頼みましました。そして、浅草にある「エ



岡井朝子在バンクーバー日本国総領事（後列左から3番目）と唐沢良子氏（同・2番目）、日系女性企業家協会のみなさんと

の考えていた美容師の夢は、初日にして崩れていきました。私には3人の先輩がおり、私は部屋やトイレの掃除、洗濯や食事の支度、子守を人でもや、休む暇もなく働きました。当時の仕事を覚えてもらえないうちへの焦りというばかりでした。どうしたら現実を抜け出し、己の人生を変えていけるか、日夜考えました。そんなある日、突然「外国に行こう」と思ったのです。この縛りから日本から出て自分の足で生きていけたらと思ったのです。その瞬間、目の前がパッと明るくなりました。そして外国に行くための計画を考えました。美容師の免許を取った私は、4年間働いた野田を後にし、東京のおじを訪ねて、美容室を紹介してもらおうと頼みましました。そして、浅草にある「エ

**外国での暮らし**  
22歳の時、外交官の家族のナニーとしてニューヨークに向かいました。またしても家事の仕事でしたが、外国に行きたいという信念がどんなに強いと良かったのです。しかし、また問題がおきました。あんなに自信を持ってやっていた私の技術は、ニューヨークでは、やり方がもう根本的に変わっていたのです。私は美容師としての技術向上のためにイギリスに移ることにしました。しばらくして高級店に職を得ることができましたが、すぐにお客様を呼んでくれない、焦る気持ちを抑えるのに苦労しました。それでもいつかどこかの国に永住したいという強い意志を伝えました。美容室の大先輩が「この子を、しつけてあげなさい」と仰ったときの喜びは忘れられません。この時は、「人の一生は重い荷物を背負って、一人で徳川家康の教訓が身に染み込んだことあります。そこで働き始めて6カ月後に、は仕上げができるようになり、指名客も増えてきました。仕事の後はお稽古を受け、美容コンクールでも入賞しました。おかげで自信ある技術をつけて羽田を飛び立つことができました。

と、誰かが必ずアドバイスやヘルプをしてくれる。人は誰かを幸せにしたいのだ、と私は感じました。自分のためだけでなく、家族、友達のため、そして社会のため」と広げていくと、自分の考えが大きく受け入れ、許せるようになるのではないのでしょうか。

**人生に足跡を残す**  
バンクーバーオヘアで役員を9年して、そこで経験とチャレンジをいただきました。わからないことだらけで、恥をかいたりもしましたが楽しかったのも事実です。そして、わからない中でわかってきたのは、高度な文化を守っていくにはお金がかかるということです。オヘアにしてもチケットの売上だけでは運営できないのです。コミュニティセンターも同様で、寄付がなければ終わりです。サポーターが必要なのです。

私は「蝶々夫人」のような劇的で人のあわれを表現する、誰でも理解できるような小説を書くことと思いましたが、「般若」を書きました。小説が書けるなどとは夢にも思っていなかったのですが、書き始めたら物語が次から次へと出てきて、気がついていたら一冊の本になっていた。今まで本を書いたこともない、書く勉強もしていない、中学校の教育しか受けていない私でも書けたのです。むろん完璧ではないですが、人は情熱とやる気があれば、ものごとを達成できると知りま



満席の会場

（取材 大島多紀子 写真 中村みゆき）